



まちを見つめる目で絵を描く

いしかり 石狩市長(北海道) 田岡克介
Katsusuke Taoka

はじめに

絵を描くのは元来好きなのですが、最近「市長の描いた絵」として、有難くも所望される方々がおおいでになり、マイペースとはいかなくなりました。断るほどのこともないと、ついついあいまいな返事をしてしまうと、楽しみが苦しみに変わります。「わが家にも是非1枚」の言葉に弱いのは、単に職業柄だけではなく、私の気の弱さの性か「いい振りこぎ」な所が出てしまうからかもしれません。

図柄はキャンパスや白紙の前の向きあいながら、手の動くままであるため、いかげんと言えばその通りで、私自身、時には何を描いているのかさえ分からないこともあるのです。故に長考に入ると、どうしても筆が動かず、次第に楽しみだったはずの作品づくりが、とても苦しいものになってしまいます。この時いつも反省をする私の姿を見て、背後から女房は「もういいかげんにしたら」と冷水を浴びせてきます。確かにその通りであるだけに、妙に納得もしてしまいます。そしてまた無の時間に入るのが常なのです。

桜は心を描くもの

通常は描き終えて額に納めた作品は、1日だけわが家に飾り、次の日はどなたかのお宅へと行くこととなります。最新

恐ろしいものだとつくづく思うところがあります。

観光ポスターで「鮭」と「歴史」を

絵の具を無理やり重ねると、濁った色になります。計算の上、色を重ねると、人の心をとらえ説得力のある「黒」となります。墨ではありません。私も石狩観光協会ポスター作りのスタッフに加えていただいております。今年で6作目、少々自慢話に聞こえたらお許しください。ですが、すべての作品は、鮭をテーマに黒を主張色としたもので、日本を代表するポスター公募展で連続入選・大賞などを頂いております。

特に、日本観光協会の常連となつてい



最新の作品である「千年桜」

の絵は「千年桜」をモチーフにしたもので、極端に大きな桜に比較して、小さな人の姿を描いたものでありますが、生命の絶対性と自然への畏敬の念を描いたつもりです。

ところで桜の散りゆくさまを、ことのほか日本人は好み、その潔さを「美しい」としてきました。桜に託した歌は数知れずあります。先日このことでわが意を得たりと思う解説がありました。「散る桜は死するものと見るより、次の生命を生み、わが身を次代に継ぐ、実に力強い行為と考えるべきだ」とのことでした。ものあわれを文学として表現することも良し、この考え方も良しと思いますが、「散兵戦の花と散れ」などは絶対否定です。

石狩鍋PRに一役

石狩は言わずと知れた「石狩鍋」発祥の地です。鮭の漁獲量の復活とともに「さけまつり」も年々盛大となり、市と料飲店の協働による「石狩鍋復活プロジェクト」もテレビや観光雑誌などに紹介され、「さつぼろ雪まつり」の際には、タクシーでわざわざ足を延ばす観光客もいるほどです。

ある日、観光担当の職員が、市長室を訪ねてきて「市長、石狩鍋のイラストを描いて下さい」と言うのです。その場でたまたま机の上にあったマジックを持って、ほんの2〜3分程度で仕上げた、相当ラ

ることには、正直なところ鼻がピクピクします。もちろんプロデザイナーの圧倒的な構成員あつてのことで、私はほんのひとつまみ程度ですが、わが事の様嬉しいものです。

自然との対話

市では文化団体による児童絵画展や、市民文化祭、公民館サークル活動などを通じ、多くの絵画活動が取り組まれており、感性の育みと交流の場を通じた社会への関心を高める良い機会となっております。加えて素材には困らないほどの豊かな自然、700社の集積を見る工業基地、郊外を歩くと純農村の風景を見ることができ、四季ごとに色を大きく移す石狩湾は、絵筆のためらいを払拭し「さあ、私を描いて下さいよ」と手招きしているようです。

私は真夏の午後4時ごろの景色が大好きで、風景画はよく黄色になってしまいます。自然は朝、目を覚まし、太陽の熱い光を浴びながら生命の営みを続け、太陽が天からゆっくり西に傾き始めると、緊張から解放されるのです。この時間帯、自然界は大きく一息を吐いて素顔を見せます。切り取って貼り付けたくなるような素顔の瞬間です。人はこの



石狩市浜益産米を使ったどぶろく「石狩に浜っちゃんい益」のラベル文字も筆者の手によるもの(左は実際の製品)



歴代の観光ポスターを背に語る筆者(左は筆者の絵を使用した「石狩鍋復活プロジェクト」ののぼり)

フなイラストを渡したのですが、まさか「石狩鍋復活プロジェクト」ののぼりとなって町中に飾られるとは思ってもみませんでした。そんな事であったなら、一晩寝ずに描いたものをも思っています。でも時間をかけたから出来のいいものを描けるかとなると、必ずしもそうではないのです。粗い筆のタッチやスピード感のある線は、それはそれで個性を表すものだからと、今はもうあきらめ、これで良かったと思っています。

それにしては原画より上手に仕上がっているのを見ると、コンピューターとは空間に同化され疲れを癒やします。

子どもたちが太陽を描かずにはいられないのは、感性が目覚めているからであつて、太陽を描く子どもは幸福への権利を持っていると私は思います。石狩っ子の描く太陽がもっと大きく、熱く強い意志を示すものであつて欲しいと願ってやみません。

私はこれからも、仕事の合間をぬって下手な絵を描き続けたいと思うのは、大好きな石狩のまちがそこにあるからです。絵の向こうにまちの姿を見つめるこの自由、たまりません。